

## パネルディスカッション

「今、必要とされているバリアフリーサービス」

### パネリスト

長野県稲荷山養護学校 青木高光氏

長野県飯山養護学校 石澤妙子氏

### コーディネーター

県立長野図書館長 平賀研也

### 平賀

本日の研修の目的として、①私達が「利用者」とひとくくりにはしている障がいのある方々が、実際どのような状況におかれているのかを知ってもらう、②私達にできること、あるいは他でやっていること、公共図書館・学校図書館で何ができるか、地域で何ができるかを考えてもらう、の2点がある。参加者の図書館や地域での取り組みなどお話を聞きたい。

### 石澤

今日は、自分が日々やっていることをお話している。以前出版社のキャラバンカーに来てもらった際に、子ども達がお話ボランティアの方の読み聞かせにとっても集中していたということがあった。また、現在フルート奏者の方に音楽ボランティアをお願いしているが、子ども達は音楽が好きだし、定期的に来てもらうとイベントではなくなるので、子ども達も受入れやすい。

校外学習で、路線バスに乗って図書館に行き本の読み聞かせをしていただいたり、借り方を教えていただいたりしたこともあるが、低学年は外出が難しい。読み聞かせも、定期的に来て頂けると子ども達は自然になじんでいくので、移動図書館車などのコースに入れていただいて、定期的に学校に来て頂けるとありがたい。

### 松本市中央図書館職員

「やまびこ文庫」という宅配貸出を行っている。高齢者や目の不自由な方などを対象に、月1回冊

数無制限で貸出を行っている。デジタール図書、録音図書やCDも貸出している。

### 市立須坂図書館長

図書館の隣に特別支援学校があり、よく利用してもらっている。先生付き添いなので、特に図書館側では読み聞かせなどはしていない。中学部の子どもたちのプレジョブの受入をしているが、職員も勉強不足でどのような体験をしてもらったらよいか戸惑っている部分がある。

### 平賀

特別支援学校は県立が殆どなので、市町村立図書館との壁もあるかもしれない。

### 青木

自分自身は本が好きで図書館に通っているが、仕事上では、情報提供という意味で電子化という事でやっているの、リアルな本を使つての授業という事をあまりしていなかった。大型ディスプレイを使つての読み聞かせなどは頻繁に行っている。1人1人の読みの困難さが違うので、一緒にやっている高等部の先生はその子にあった絵本をもってきて読み聞かせなどを行っている。その本を用意するときに近くの公共図書館を活用している。自分たちの知識だけでは限界があるので、いろいろなニーズにあわせて本を紹介してくれる人の存在は、地域資産として確保しておく必要があると思う。

### 平賀

図書館では当たり前のように本を選んだり紹介したりしているが、今日のお話のような微妙な感じ方の差などまで考えているかというところではない。図書館の側にとってチャレンジングな、いいチャンスだと思う。障がいのある人だけではなく普通の人にも使えること。そういう意味ではご紹介いただいた「筆順辞典」などのアプリも障がい者向けではない。そういうものはたくさんある。

青木

「筆順辞典」は学習アプリだったが、昨今は筆順という事はあまり重視されていない。ただ、運筆というのは視覚情報としてとらえるのが難しい部分があるので、「筆順辞典」アプリのように、アニメーションのように動いて示すものの説得力はすごい。先生方も自分で使っている。

平賀

図書館では収蔵資料の提供を旨としてきたが、あのような形で違う知る機会や方法は、基盤さえあれば提供できるのではないかと思った。障がいをお持ちの方に意識が向いたことによって、そうでない方にとっても、もっと違う形での知る学ぶ機会はあるなと思った。最近電子絵本を使った読み聞かせなども始まってきていると思うが、バリアフリーサービスを考えたときに、より効果的に手渡せる道具として考えてみていいかと思った。

本を手に入れる上で困ったことなどはあるか？貸出制度などで。

石澤

昨年、県立図書館で現在の貸出制度を知った。特に大型絵本は学校にはないのでよく利用する。期日指定で本が借りられないのは苦しい。予約をしても取り置きは1週間。実際に使うのは特定の1日だけなのに、1か月間借りているのは心苦しい。横断検索で各館の検索は出来るが、特色あるそれぞれの図書館の蔵書を居ながらにして利用できる良さを更に充実していただけたらと思う。手続きもあまり複雑でなければありがたい。県、市町村それぞれの図書館の連携を今後も期待している。

平賀

地域の中核となる図書館がもう少し広域で役割をはたしてもいいのかとも思う。

音訳ボランティアの方、今日のお話を聞いて

の感想などあったらお話いただきたい。

音訳ボランティアの方

視覚障がい者のための音源を作っているが、IT化が進んでいて、様々な障がいに対応できるという話は聞いたことがある。いろいろな障がいそれぞれ対応したのがあることを知り、子ども達にそれが使えればいいかなと思った。

平賀

今まで視覚障がいの方だけを対象にしていたが、また違うニーズがあるかもしれない。盲学校などでは点字絵本などいろいろな教材をPTAの方と協力して作ったりしている。

ICTの面ではどうか。図書館にあったらいいと思うようなものがあるか。

青木

音訳ボランティアの方々のコメントはたいへん考えさせられる。デジ図書は音声情報があることで、発達障害、特に読み書きに困難がある子どもたちが救われるという事がわかったが、それは視覚障がい者の方への支援という事で、インフラ的な基盤が充実していたという事が大きい。ボランティアの方々などの努力や情報提供などで支えていただいたことが大きい。ICTが導入されてIT化が進んだからと言って、自然音声（人の声での音声）が必要なくなるという事はない。まだまだ機械音声は未熟で情感を込めることは難しい。だからと言ってそれぞれでやればいいという事ではなく、障がいを支えるという様々な取り組みが充実して、こちらの障がいのためにやっていたことが別の方でも役立つという再発見がまだまだおきくと思う。地域の図書館にいろいろと触れられるものが増えるといいと思う。障がいを障がい種で見ている限り再発見は中々なされない。困難ベースで見ることが大事。読めないという事に対してどうアプローチするか、物語を楽しむためにどうするかというような視点でやっていると、図書館でも障がい者支援がもっと充実

していくと思うし、子ども達がこんな絵本を音読で聞きたいというリクエストができるような仕組みがあれば楽しい。

平賀

障がい困難ベースで見るとするのは大事。伊那市立伊那図書館でiPadを使った読書会をしたところ、高齢者に好評だった。また、iPadを一番使ってくれたのは特別支援学校の子ども達だった。居場所として使ってくれていた。

男性参加者

お二人の発表は対照的だった。石澤さんは図書館があったからこんなことができたというお話で青木さんは本はあまり使っていないという事だった。2人とも養護学校所属なのにやっていることが違う。カリキュラムが違うのか。また、そのカリキュラムを広げていくことはできないのか。

石澤

養護学校の知的障害の子どもには、一般的な(皆が同じ)教科書はない。教科用図書としての本のリストから選択しているの、小学部中学部の子どもの教科書は、一般的な図書(絵本等)である。子どもにあわせてカリキュラムを作っている。盲ろう学校では準じたカリキュラムになっている。高等部は子ども達が先生と相談しながら図書を選んでいる。個人用のiPadも教材の一つとして購入できるようになった。

青木

今の質問は図書館や本の活用という事に関して同じ養護学校の教員なのにこれだけアプローチが違っていいのかという事かと思うが、石澤先生は小学部、自分は高等部でなおかつ自分は担任ではない。子ども達に体系的に教えるという立場ではない。そもそも特別支援学校には決められたカリキュラムは無く、その子どもにあったカリキュラムを作らなくてはならない。本の活用に関し

てのアプローチの違いは、部や立場の違いからくるものである。

平賀

今までは本という「知る基盤」をどのように障がいのある人に届けるかということをやってきたが、新しいものが出てきたときに、これからの基盤とは何かということで、今、養護学校でも従来の基盤とは違うものが生まれつつあるように思うが、それは学校だけのことではなく、あるいは障がいのある方たちだけのことでもなく、地域の図書館でも同じテーマを抱えているように思った。

～～ グループディスカッション ～～

テーマ：これまでの話を聞いて、自分の地域で「このようなことができるかもしれない」「こんな基盤を整えていったらいいかもしれない」「今のサービスをこう変えたらいいのではないか」という事をディスカッションして発表してほしい。その中にいい種があったらプロジェクトとして動かしていきたい。ディスカッションするにあたっては、地域、複数の図書館、図書館と学校図書館、学校と図書館などを意識してディスカッションしてほしい。

～～ 発表 ～～

参加者(若槻養護学校)

どういう障がいがあってその障がいに対してどのようなフォローをしていったら本が読めるかという時に、こういう媒体があるからこういう本が使える、こういう本を読んでほしいというボランティアの方との架け橋の役目を図書館や司書にはしてほしい。ICTや大型絵本の活用などの面で、図書館や司書お願いできることは多いと思う。

参加者

障がいをお持ちの方に対する選書コンサルタントというプロジェクトで、担任の先生、ICTの

スペシャリスト、図書館司書のトライアングルで常に有機的に動いて、それぞれのニーズに合ったコンテンツ作りやデリバリーのしくみをそれぞれの個別のケースで作りあげていくということを考えた。

平賀

方法、本、媒体などについて、公共図書館が地域の人のためにとりあえずは助言が出来たらいい。そのうちに情報のハブとして、スペシャリストが居て、知る学ぶについてアドバイスしてくれるコンサルタントが図書館ですと言えるようになれば素晴らしい。プロジェクトとして今の3つをつないだ、バリアフリーのための方法論のリストを作る研究組織をぜひ作ってほしい。

松本市中央図書館

図書館視点という事で話し合った中で、iPadなどの情報を地元の先生や保護者に伝えることが図書館としての役割ではないか。また、図書館からの情報発信がなかなか受け入れられないという中で、先生や保護者など幅広い情報の共有が大事であるという意見になった。また、特に特別支援学校の先生方と連携しながら情報交換した方がよい。特別支援教育の発展が通常教育の発展につながる。様々な方への支援が一般の方の生活の発展につながる。

平賀

先日青木先生のところへ伺った時に、アプリの中で、あらゆる人が使えるアプリが一番素晴らしいという話を聞いた。

青木

この障がいのある方のためにという事で開発したアプリが広まって行って、その便利さが他にも使えるという相互作用が起こってくるという事がある。その障がいのためにという前提、しばりを解いてみないと、広まって便利なものは生まれてこない。タブレット自体にもそういう側面が

ある。障がいのある方もおしゃれなものを使いたい。タブレットもいずれ当たり前のものになる。そうなった時に選書コンサルタントのように本についてアドバイスしてくれるような人が存在する世界になって先ほどのようなアイデアが重要なのかと思う。

平賀

障がいがある無しの話ではないと思う。伊那の図書館では何かのためにという事ではなく iPad を並べてみた。人と情報の距離が違って来た。活用をどうするかという問題は単館では難しいかもしれないので、また一緒にしくみを考えていきたい。

移動図書館などの話や団体貸出

小澤

普通小学校で少し障害を持っている子どもが図書館の1冊の本に固執するという事例がある。横浜市ではこういう本がほしいというリストを示して市民からの寄贈を募るという取組をしている。この二つの事例をマッチングさせて、図書館が物を經由させるハブになる仕組みができるのではないかと考えた。

平賀

長野県の特別支援学校にはきちんとした図書館がない。公共図書館の除籍本や地域の方からの寄贈本などを求めているところへ届けるという事も有り得る。

(グループディスカッションしたことを紙にまとめてほしい。)

干川

公共図書館は特別支援学校で求めているものを知らなすぎると感じる事を感じている。また、先生方も図書館を使う事に慣れていないという事がある。自分たちにできることは、わかっている人から話をまず聞く、情報交換をする、そしてまたその情報を伝えていくという、そんなつながり

は、人と人でなければできないと感じている。

平賀

県立図書館でも今年度から県内のいろいろなところで研修などの機会を作っている。そのような場でもいろいろな話題を出していただければと思う。また、できれば今日議論したことを具体的なプロジェクトとして研究できる体制を作っていきたいと思っている。